

## 中国佛教への道しるべ (二)

横 超 慧 日

中国佛教の研究と一口に言っても、教義信仰を主とする場合もあり、社会的に寺院僧尼を廻る現象面を主とする場合もあって、その巾は甚だ広い。実際は両者が別々に孤立してあるのではなく、教義信仰で結ばれた寺院僧尼が社会的存在となつていのであるから、その区別はどこまでも関心の焦点をどこにおくかということから分れるのであり、互に他を離れて成り立つものではないこともちろんである。従つて多くの大学で、教義信仰を主とする研究は佛教学科に入れ、社会現象を主とする研究は東洋史学科若しくは佛教史学科に入れ、別々に講義されてゐるのが通例であるけれども、これはどこまでも便宜の一往のことであることを忘れてはならない。宗門立の大学では更に佛教学科を佛教学一般についての講座とその宗の宗学専門の講座とに分けられることが多いから、

結局、同じ中国佛教を研究するにしても、宗学内で研究する者と、佛教学科で研究する者と、佛教史学科で研究する者と三様に分れてくる。その結果、そこに研究の対象だけでなく、学問の態度傾向にも三つの異つたものが起ってくる。宗学として研究する者は、伝統の重視に偏して自分を与えられた教義の中へ初から没入してしまふから、客観的に批判の眼を以て見ることが困難となる。自然、客観的な歴史の解明という見地からは遠ざかるであらう。宗教は客観的に批判され歴史的にあとづけられるということに於てのみその使命を全うするものとはきめられないから、宗学がそのことによって意味を喪うものではない。然し余りに宗学内での歴史を固執すると、独善偏見による牽強附会の説に陥り、欠点や短所に対しては一切目を覆うの弊が起らぬとは限らぬ。次に佛教学

科では、教義信仰を主とするからどうしても経論の研究が主となるが、この部門ではどうかすると教義書の解説だけが精一杯の仕事になって、古来の術語を襲用し自分にもよく消化できぬままに、いつまでもそれから脱皮しようとしぬ安易さに落着き勝ちである。そして少数の思想家・哲学者だけの説を自分に可能な限りの合理性に於て理解し、その中に秘められた宗教的意義が往々にして見失われる。正依の経論があり思想の先駆者があれば、必然的に某々の理論体系がでてくるように考え、歴史的流れの中から宗教の動きをとらえることが忘れられはしないであろうか。ここでは大衆は置き忘れられ、社会と遊離した抽象論だけが議せられるようである。それならば東洋史学科や佛教史学科ではどうか。もちろん中国史の中で佛教に関する諸現象が扱われるのであるけれども、思想や信仰というもので動いている人々や事象を論ずるのに、その思想信仰がどんな内容のものでありどういう伝統を持つものであるかを知ってとりかからぬと、人間の歴史にはならぬという危険がある。浄土教は何を理想とし禅はどんな生活態度を期しているのかを考えないで、それらに関した現象の意義がどうして正確にのみこめよう。ところが実際にはそうした弊が往々にしてみ

とめられる。佛教思想の理解程度如何によって、その人の史学的研究の進みにも限度があることを感じさせられることである。

以上のようなわけで、学科別に分けることはあくまでも便宜的なものであるから、佛教の教義を学ぼうとする人も中国の一般的歴史についての基礎知識を欠いてはならぬし、佛教史を学ぼうとする人も教義信仰についてでざるだけ深い素養を持つように留意して頂きたい。こんなことは自明の道理で、今こと新しく喋々するのがおかしい位であるが、現実はやはりそれを強調しておく必要を覚えるので、敢て冒頭にこのことを特記した。

先ず初めに着手として、印度佛教史と中国佛教史の概説書を読むにはどんな書があるか。さしあたり、龍山章真氏の「印度佛教史概説」（法蔵館）と道端良秀博士の「中国佛教史」（法蔵館）とがよからう。日本の佛教については、圭室諦成博士の「日本佛教史概説」（理想社）等が適當であろうか。もう少し簡単なものに、塚本善隆博士等四氏の共著になる「佛教史概説中国編」（平楽寺書店）や龍谷大学編の「日本佛教史」（百華苑）などがあり、又佛教を印度思想史全体の上から眺めたものとして、中村元博士の「インド思想史」（岩波全書）の好著がある。こ

これらのインド・中国・日本の佛教史については何れも他に詳細な研究書があるけれども、繁簡よろしきを得て、入門書としての配慮が払われている点で、前記の三書などは先ず最初に目を通すべきもののようである。中国佛教史としては、私どもの学生時代、境野黄洋博士の「支那佛教史綱」（森江書店）が最も広く読まれ、次いで同博士の「支那佛教史講話」（二冊・共立社）、「支那佛教精史」、伊藤義賢博士の「支那佛教正史」（竹下学寮出版部）などがあり、後には宇井伯寿博士の「支那佛教史」（岩波全書）なども出た。何れも人物や文献中心の歴史である。常盤大定博士は東京大学佛教青年会の編集による青年佛教叢書の一として「支那の佛教」（三省堂）という小著を出された。これは支那の佛教思想と支那佛教史との二部より成り、前者は伝訳論・立宗論・教判論・心識論・法界論・中道論・佛性論・修道論・成道論の九章より成り、後者は準備（漢三国）・研究（南北朝）・建設（隋唐半）・実行（唐半五代）・継紹（宋以後）の五章より成る。他の多くの歴史書が、高僧伝や八宗綱要をとりあわせたような傾向の強いものであったのに比し、これは佛教の経論はもとより中国の実地を踏査して史蹟文物に接し、且つ儒教や道教にも深い造詣を持たれた上での広い視野に立っての講

義である。常盤博士は「支那佛教の研究」（春秋社）と題する論文集を生前三冊公にされたが、その第三冊には「中国佛教史概説」「中国佛教の特色」「中国佛教の鳥瞰的素描」等の諸篇が収録された。みな異色あるものとして示唆する所多き論文である。その他にも常盤博士には遺跡の上から佛教史を開明せんとした「支那佛教史」（雄山閣）の稿が東洋史講座の第十二巻に入っており、他者の追隨を許さぬ所が公にされている。

以上の諸書二三に目を通し漢文も多少読めるようになったならば、中国での出版であって中国文に慣れぬ間は一寸骨が折れるかも知れぬが、北京大学の副学長をしておられた湯用彤氏の「漢魏兩晋南北朝佛教史」（二冊・商務印書館）を是非勧めたい。標題の通り、漢魏兩晋南北朝の時期を限っての佛教史であり、佛教が隆盛の絶頂に達した隋・唐時代及びその後の五代・宋・元等の状況には論じ及んでいない。全体を二十章に分ち、中には「釈道安」だとか「釈慧遠」だとか「竺道生」だとかいうように、重要な人物に関してはその人を中心にして夫々一章を設けて論じてある。又「兩晋際の名僧と名士」だとか、「釈道安時代の般若学」だとか、「鳩摩羅什及びその門下」というように時代を一括して大観した章もあり、「南方

の涅槃佛性諸説」とか、「南朝成実論の流行と般若三論の復興」とか、「北方の禪法・淨土及び戒律」というように、一つの課題若しくは関連の密接な二三の系統に対して総合的な考察が下されている章もある。此は入門書でなく博引傍証を尽くした精密な研究書であるけれども、今日では中国佛教研究者が必ず一度は目を通さねばならぬ必読書となっている。唯だ文化史の観点から遺蹟文物に論及したり、各学派の教義信仰を組織的に論述し明確にするという上では、この書の殆ど触れぬ所であった。故にそういう点は、中国の哲学史・文学史・美術史等を参照したり、経論及びそれに対する古来の疏釈類を各自研究し、この歴史書を思想史の基本書として活用できるように心がけるべきであろう。

この辺で、中国佛教研究者が心を配っておかねばならぬ補助学について申し添えておきたい。先ず、中国史の概説書を読むこと。和田清博士の「中国史概説」(二冊・岩波新書)などを初めとして、この方面の参考書や教科書は枚挙にいとまがない。「京大東洋史」(創元社)は全体が時代を追って五冊に分冊され、その各冊が又専門家

によって各章分担されている。系図・参考文献・索引・附図等も附いていて入門者には便利である。中国佛教をやる以上は正史としての「二十四史」を読まねばならなくなるから、そういうものについての知識も追々深め、「二十二史劄記」(三十六卷・清趙翼)などにも目を通して史書を読む上での基礎知識を養っておきたい。但しそうは言っても、「二十四史」など読むとなれば、史学を専攻した人でないと手がつけられるものでなく、まして資治通鑑(二九四卷・宋司馬光)などとうてい初からとりかかれるものでないから、概説書・教科書的なものの次に漢文にも習熟する意味で読むものとして、「支那通史」(五冊・那珂通世)などは恰好なものでないかと思う。明治二十一年に出た書物だから、東洋史学がその後隔世の進歩を遂げている今日、どうかという評もあるう。然し、年代を追って宋代までの史実をまとめられている手際は、今も尚尊重される十分価値ある本だと私は素人なりに考えている。この書は岩波文庫の中へ和田清博士の訳注に成るもの(三冊)が入れられている。東洋史辞典や地図や年表など数え出したら際限がないが、一先ず一冊のものですまそうというなら、東洋史辞典(京大東洋史研究室)がよからうか。年表だけはポケット用の東洋年表(野上俊靜

・藤島達朗編)を常に携帯して、面倒がらずに繰ってみる癖をつけるようにしたい。

それから哲学史について、是非とも一読を要する。狩野直喜博士の「中国哲学史」(岩波書店)は最も権威あるものであろう。しかし取敢ず、武内義雄博士の「支那思想史」(岩波全書)のように簡潔な本によって、儒佛道三教関係の大綱を知っておくのも有利である。久保田量遠氏に「支那儒佛道三教史論」(東方書院)、又常盤大定博士に「支那に於ける佛教と儒教・道教」(東洋文庫論叢第十三)という大著があるけれども、これは少し研究が進んだ上で見るべきもの。三教関係を知るためには、交渉資料に当る前に三教の基本文献を夫々習学しておいてから入らねば駄目で、そうでないと何時まで経っても曖昧な議論に引きまわされて三教それぞれの本領もわからないし、それらが互に錯綜した議論を繰返すことの意味もわからぬままに終ってしまうであろう。易(中でも特に繫辭伝)や論語や老子・莊子などを初め、主要なものについては是非そのテキストを手許に揃え、日頃親しむようにしたいものである。否、一度は全部通読しておかねばなるまい。引用された辞句を検索したり対照するために必要な時にその部分だけを開いてみるというのでは不

可。それらの参考書は今ここに挙げぬが、清の皮錫瑞の著に周予同氏が注釈した「經学歴史」(中華書局)など、大いにためになる本ではないかと思う。

道教は佛教と密接な関係を持つ宗教で、古くは小柳司気太博士に「東洋の思想と道教」(森北書店)や「道教概説」(世界文庫)があり、最近では福井康順博士の「道教の基礎的研究」(書籍文物流通会)を始め大淵忍爾・吉岡義豊・窪徳忠等の諸教授により著々と力作が発表されている。然し初歩向きの入門書というものは今のところ見当らぬようだ。宮川尚志博士は「六朝史研究」で宗教篇(平楽寺書店)や政治社会編を出して視野の広い学者である。同博士の「六朝宗教史」(弘文堂)は中国の宗教一般を知る上によい参考書だと私は考えている。

文学史としては、長沢規矩也博士に「支那文学概説」(法政大学出版局)があり、青木正児博士に「支那文学概説」(弘文堂)がある。どちらも初歩向きで、佛教を学ぶ者もこの程度のことは知ってかからねばならぬ。従来は、佛教研究者が中国の文学に対して、余りにも素養が欠いていた感がある。中国佛教に対する文学的考察が何と遅れていることか。劉師培の「中国中古文学史講義」(人民文学出版社)は短いものだが仲々しっかりした名著だと

思った。進んでは、文選（梁昭明太子撰、唐李善注）なども此を骨折って読めば六朝佛教の文献を渉猟しようとする者にとって、大いに実力がつくことであらう。少し程度が高いが、武内義雄博士に「支那学研究法」（岩波書店）という本があり、諸橋轍次博士にも「経学研究序説」（目黒書店）という本がある。専門的にしっかり学ぶためには必読の書だと思う。

建築史や美術史も、寺塔や佛像との関係で見のがせない。伊東忠太博士に「支那建築史」（東洋史講座雄山閣）というのがあり、村田治郎博士に「支那の佛塔」（富山房）という本がある。どちらも平易で解り易い。常盤博士と関野貞博士とが共著で公にされた「支那佛教史蹟」（佛教史蹟研究会）並に「評解」は第六輯まで出た畢生の大作で、考証研究の「評解」は入門者向きでないが、とかく知識が文献の上だけに限られ勝ちな中国佛教に対して、建築・彫刻・碑文・地勢等に関する現状写真の豊富な紹介は我々に身近かな親しみを覚えさせる。本来は日本佛教の研究がそうであるように、その土地を実地に歩いて山川風物を調べ遺跡を探索しなければ十分な実感を持ってないのであるが、中国では今日それを自由になすことが許されない。又容易でない。大正年間に当時としても決

して容易なことではなかったが、あらゆる辛苦を冒して踏査を敢行せられた博士の業績は特筆すべきものである。博士には、紀行日誌の如き読みものに「支那佛蹟踏査・古賢の跡へ」（金尾文淵堂）、「支那佛教史蹟」（同上）、「支那佛教史蹟踏査記」（龍吟社）等がある。また中国佛教の研究者に楽しい読みものながら研究意欲を沸かせるであろう。是非一読を勧めたい。

大蔵經一般についての知識を得るために読んでおくことも必要である。以前には東京と京都で大正四年以来大蔵会展観が毎年一回開かれた。今では京都だけになったが、そこでは佛教関係の古写經・古版本が陳列されその都度目録も出されている。平生こういうものに関心を持つて機会ある毎に見る習慣をつけることを怠ってはいけない。小川貫武教授の執筆に成る「大蔵經―成立と変遷」（百華苑）は京都の大蔵会が創立以来五十周年を迎えた記念の出版で、初心者向きというのではないが、田中塊堂氏の「古写經綜覽」（鶴故郷舎）などと併せて古写經・古版本への関心を深めさせるに相違ない。

概説書を或る程度読んだならば、特殊の題目についての研究書を渉猟しなければならぬ。多くは論文集の形で発表されるが、その中でも、全般を見わたすことに主眼

をおくものと部分的にあらゆる角度から詮索したものとが分れる。考証の進め方や資料批判の方法、理論の構成等について学ぶには後者がよく、大局的観点から推移変遷の跡をたどり出来るだけ視野を広くするには前者の傾向のものがよい。何れにしても、研究書を読む時には、それが公正・周到・着想・批判・論理等の上でどんなに注意されているかを考えながら読み、単に書かれている内容の結論的事実を知るだけに止めてはならない。研究の進め方を学びとることが大事である。そのためには定評ある学者の権威ある論文を精読するがよい。徒らに新しい資料のみを漁っても、自分自身の研究態度が確立せぬ限りは資料に圧倒されてそれを整理し駆使することができぬであろう。そういうことは自分で自然に体得すべきものかも知れない。各自の興味や性格にも関係あることだから、今これ以上深入りすることは止める。

前記道端博士の「中国佛教史」は、附録として、参考文献の著者・発行所・発行年時を明記して列挙し、又雑誌や記念論文集に発表された論文も事項の古い順に雑誌名・著者名・発行年時が明示され五〇〇篇近くの論文名が列挙されている。その他、先年龍谷大学図書館の編纂で「佛教学関係雑誌論文分類目録」(百華苑)が出され、

近くは「印度学佛教学研究」だけについて、論文総目次と著者名索引・項目索引を収めたものが同学会から出された。そういうものを利用することも日本における最近の学界の大勢を知り、専門研究同学者の所在と業績を知る上に役に立つ。京都大学の人文科学研究所では、昭和十九年以来、「東洋学研究文献類目」をほぼ一年毎にまとめて発行されているから、それを見れば佛教関係の部と併せてその他の関連諸部門の研究状況を知ることできる。その中には日本文だけでなく、中国文のもの、欧文のものも収められており、雑誌論文も単行本も収録されているから学者に益する所大である。

次に中国佛教史を研究するには、近代の人の研究書・研究論文を読むのと同時に、古典としての必読基本典籍を知らねばならぬ。以下そういう見地から代表的なものを紹介しよう。古い所で言えば、高僧伝と続高僧伝の中の主要な人物について目を通しておく必要がある。「高僧伝」(梁慧皎)は佛教初伝以来梁代までの凡そ四百五十年間に互る高僧二百五十余人(その他附見の者二百余人)の伝を訳経・義解・神異・習禪・明律・亡身・誦経・興福

・経師・唱導の十科に分類して伝記を作ったものである。道安・慧遠・羅什・法顯・僧肇・竺道生等の伝記はこの中にある。又「統高僧伝」(唐道宣)はその後を継いで唐の貞観年間まで凡そ百四十年間の高僧四百余人(その他附伝二百余人)の伝を同じく十科に分けて集録したもので、その中には真諦や菩提流文・玄奘等の訳経者や、光宅寺法雲・淨影寺慧遠・曇鸞・智顗・吉藏等中国佛教の代表的人物が多く載っている。此を継ぐものが「宋高僧伝」(宋贊寧)であり、義浄・善无畏・窺基・法藏・湛然・慧能・道宣等の伝記はこの中にある。対象が異なるから取捨することはできぬけれども、これら三伝の中の主要なものについては必ず目を通し、又梁の高僧伝を通読して僧伝の全貌を知っておくことは有益だ。以上三伝の中で統高僧伝が一番文章難解であるが、みな国訳一切経の中に入っているから、参照して読むことができる。

高僧伝としては今挙げた高僧伝(十四卷・梁高僧伝)、統高僧伝(三十卷・唐高僧伝)、大宋高僧伝(三十卷・宋贊寧)の他に「大明高僧伝」(八卷・明如樞)があつて、此を通常四朝高僧伝という。以上四伝の他に此を継承して中華民国八年に「新統高僧伝四集」(六十五卷・道階・諭謙居士等編)というものが作られた。宋・遼・金・元に互るもの

もあるが、主として明清時代の僧伝が大成されたものである。佛教の隆盛は南北朝から隋唐時代にかけてのことであるから、通常は初めの三伝で足り、僧伝としても後の二者は遙かに劣る。尚この他に「比丘尼伝」(梁宝唱)や「海東高僧伝」(高麗覺訓)などという特殊なものもあつて禅宗の伝燈法系を集録したもの等を合すれば、それらに記載される僧尼の名は実に尨大な数に上る。そこでそういう多くの書物の中から、必要な僧名伝記を探し出すのは容易なことではないが、略伝とその出典を明記したものに、「僧伝排韻」(百八卷・日本堯恕)というものがあつて、全体を韻の順序に従つて排列されている。大日本佛教全書に入っているものは、それを五十音順に列べた索引がついているから便利である。尚「支那佛教史学」という雑誌は、創刊号から九回に亘つて、梁高僧伝の索引を連載した。出三藏記集・名僧伝・弘明集・歴代三宝記・広弘明集等の関係資料を参照して、梁高僧伝にある僧名・俗人名・寺廟・書名等の所在を大藏経中の頁数によつて示し、原文の引用もしている。初期の時代を研究する人には便利なものであることを申し添えておく。

次に、中国佛教初期の思想資料として、出三藏記集と歴代三宝紀と及び弘明集・広弘明集を忘れてはならぬ。



「出三藏記集」(十五卷・梁僧祐)は後漢時代から梁代までの間に翻訳された経律論等の目録で、併せてそれらの序や後記等を集録し、且つ訳経関係者の伝記がつけられている。中国では経論が多くの人によって随時持ち来って随処で翻訳され、その中には同じ原本が何度も翻訳されたり、同時に翻訳されながら或るものは盛んに研究され、或るものは殆ど全く読まれなかったものがあつたりして、そういう事情が中国佛教思想の形成に重大な関係を及ぼしている。經典の翻訳年時やそれを持ってきた人の出身地というものは、その經典が何時頃どの地方で作られ若しくはどんな地方で行われたかというのを考える上に、印度佛教や西域地方の研究者にとつても極めて重要な資料を提供する。だから訳経目録(略して経録という)は非常に大事なもので、中国では古くから度々作られたが、出三藏記集は現存する上で一番古いものである。それは百余の序文が集録されていることと重要な人の伝記が載っていることにより、又特に貴重な価値を持つ。序文は翻訳した時の関係者や又はその注釈者などが、翻訳までの経緯や研究注釈に至る事情を記述しているから、史実の根拠として第一資料たるこというまでもない。然しそれと同時に、その経論の要旨紹介や成立並びに研究

の経路記述がなされている点は、思想史若しくは研究史の上でもこの書を極めて貴重な資料たらしめている。こういうことは案外見のがされ勝ちだが、注意すべきことだと思ふ。そして又その伝記が量に於ては高僧伝より少いけれども、確かな根拠に立ち且つ年代上最も早いものである点に於て此は価値高いものである。

この出三藏記集に次いで重要なものが「歴代三寶紀」(十五卷・隋費長房)で、前者が南北朝時代の南朝に重点をおくのに比してこれは北朝に詳しく、然も北周の廢佛という大事件の後で作られたものであるだけに、佛教と国家との関係を考えさせる切実な気分がただよっている。

その他この書は色々の点で特色があり、単に経録として片つけられるべきでない。利用の仕方によつては、佛教史だけでなく、中国の史学史上にも政治史上にも思想史上にも意外に収獲を与える宝庫である。経録としては後世の爲の一基準となつた開元釈教録(二十卷・唐智昇)も利用することを忘れてはならぬ。

次に「弘明集」(十四卷・梁僧祐)と「広弘明集」(三十卷・唐道宣)とを挙げなければならぬ。佛教を専門の教理学若しくは通俗の庶民信仰として見る外に、中国の知識人である士大夫階級の間へ教養としてどのように浸透し

て行ったかを考えることは甚だ重要な仕事であるが、この二書はそういう資料として最も貴重なものである。佛教思想の担い手を、高遠な教義理論を説く各宗の祖師や、行事・靈驗にのみ終始する庶民だけだと考えては、中国佛教を知る上に大きな欠陥となる。高い国民的教養を以てその上に佛教を受けとめようとした士大夫階級の動向というものは、そうした階級の地位が中国の歴史上甚だ重要なものであっただけに、佛教思想の研究者として決して忘れることのできぬ意味を持つてくる。そういう点で、多くの非専門家の知識人によって作られた論文――それは賛否両方の立場から議論されていることが多

いので思想闘争の資料と言えるが、佛教側からすれば護教的と云ってよい――を編纂した弘明集及び広弘明集は、中国佛教研究者の絶対に見逃せない宝庫である。尤もこれを読みこなすためには、歴史・文学・哲学に互りいわる支那学の深い教養を必要とするから、佛典の知識だけでは歯が立たぬ。逆に又佛教思想の基本を心得ていなければ消化できぬことも確かであるから、こういうものを読むには佛教学と支那学との両方の学者の協力が一番効果的である。私も十余年来、京都大学の人文科学研究所を中心にそういう協同研究を進めてきた。「慧遠

研究」(二冊・木村英一編、創元社)や肇論研究(塚本善隆編、法藏館)などはその成果である。

それから、佛教史を通覧する上で、基礎知識を与えるものとして「僧史略」(三十巻・宋贊寧)を勧めたい。これは宋の初めに作られたものだが、佛教の東伝・経律論翻訳の初例・注経講経・出家受戒・談論賜号・官秩・結社等すべて五十九の項目についての制度を論述したものであり、全く初学の人にはむづかしいけれど、本格的に中国佛教と取り組もうとする人には欠くことのできぬ鍵である。著者贊寧は、前にあげた宋高僧伝三十巻の著者で、梁の僧祐・慧皎・隋の費長房・唐の道宣等と伍して屈指の大歴史家である。この僧史略は、高僧伝と併せ見ることによって一層その真価を発揮することであろう。

もう一つどうしても言及しておきたいのは、「佛祖統記」(五十四巻・宋志磐)である。これは中国の天台宗の立場から、正史の体裁にならって編纂した佛教歴代の歴史で、その中には佛伝から始めて天台宗にとっての印度と支那歴代の祖師たちの伝記を挙げる他、浄土願生者や諸宗の祖師のこと、地理・寺塔・碑文・故実・制度・典籍等あらゆる事項に関して集成している。本紀・世家・列伝・表・志の五篇に分った体裁は史記以下の正史に倣っ

たものであり、その中に法運通塞志の一項は司馬溫公の資治通鑑に倣ったものと言われる。法運通塞志は釈迦佛の降生から南宋理宗端平三年に至る間の佛教関係の史実を編年的に収録した五巻の内容であり、佛教大年表の原始形態と言ったようなものである。この後で「佛祖歷代通載」(二十二卷・元念常)、「釈氏稽古略」(四卷・元覺岸)等同種のものが継いで現われるが、こういう編年史の記録は佛教史を研究する者にとって種々の問題に関心を喚び起すつてとなる。平素折にふれて開いてみるならば、教義理論ばかりを考えていた頭脳に、忘れていた広い領域のあることを思いおこさせることまぢがいない。佛教関係の年表としては望月信亨博士の「佛教大年表」(佛教大辞典発行所)があり、これも亦必備の書であらう。

この外にも、読むことを勧めたい本はいくらもあるが、大体ここでは初步入門者のための道しるべだから、多くを網羅したり研究的に詳論することはわざと差し控える。それ以上のことは、ここに挙げた参考書や書物を読んだ人ならば、自然に自分でわかって来るはずで、程度の進んだ人のためと全くの初歩の人のためとを一諸にすると、却って混乱を招かぬとも限らんの、今はこの辺で止めておきたい。専門家は、史学や書誌学の方から論述せら

れた「中国佛教史籍概論」(陳垣)などを参考にされることを希望する。

以上中国佛教史研究者が、初にとりかかる入門書を若干紹介した。私はどちらかと言えば教義を主として研究している方で、史学・文学・哲学等のいわゆる支那学については専門外であるため、學術の進歩と研究書出版の盛んな今日に於て上記の事項中にはより適切な参考書を漏らしているものも少なくないと思う。私の狭い経験に基づく一つの参考意見として、寛恕を願うこととし、以下今度は教義思想の方面では何から始めたらよいかというに移ろう。佛教思想という以上、原始佛教から始めねばならぬ。佛滅年代論や釈尊の伝記・四諦・十二因縁・八聖道・三法印などを初として、基本的教義を先ず確かめるべきである。然し起源に溯って本格的に学ぶと言っても、自ら限度がある。私は学生時代に最初日本佛教を研究しようと思つて、平安時代初頭の伝教大師研究にとりかかったが、「守護国界章」などを読んでいたら唯識・華嚴・天台等へ溯つて調べねばならぬことになり、段々追究しているうちに、中国佛教の初期まで行つてし

まった。そうして終に初の目的からはなれてしまった。

私の友人の中には天台宗を研究する目的で法華經に着手したが、原始佛教まで溯って研究しようと思っているうちに、その背後関係追究の意図がいつの間にやら彼を印度哲学の専門家にしてしまったという例がある。源流をたどれば限度がないのだし、又一人の人間で八方に目をくばって万全を期するというわけにもゆくまいから、或る程度でがまんし、それ以上は専門学者の業績を絶えず吸収することに心懸けるとしよう。唯だ原始佛教・部派佛教・大乘佛教・西域佛教等と、全般に亘って展開の經過をたどりながら、物を考えるということ忘れぬようにしたいものだ。この場合に於ても、大乘經論や西域佛教にどの程度通曉しているかに従って、中国における教義信仰の味得に深淺の差が出てくるから、梵語の知識は或る程度絶対に必須であり、それをたよりに同じ原本でありながら翻訳者の異なるもの（同本異訳の經という）などを自分で対照してみることも好いことである。そうした学習努力が、どこことなくその人の佛教史研究を豊かなものとする。然しそうは言っても最初からそんな仕事ができるものでない。それで初めはどうしても教義の平易な入門書から入る外ない。佛教学の教義概説書

は従来公にされたものが少なくなく、山口益博士他私も加った四名で共著の「佛教学序説」（平楽寺書店）が今のところ多く読まれているようである。今日では各方面に多数の研究書や教科書があつて俄かに甲乙をつけたいが、私たちが学生時代に読んだ木村泰賢博士の「原始佛教思想論」（丙午出版社）は今では一寸古くなつたとはいえ、相変らず佛教を楽しく味解させる好著だと思う。佛教は理論として無理に詰めこむよりも、自分に心から納得しかかることが重要だ。この本よりもっと簡単にそして又もっと平易に要領を説いたものとして、私はやはり同博士の「印度哲学佛教思想史」（甲子社書房）という本を推称したい。宇井伯寿博士の「印度哲学研究」を初とし、学問的に權威の高い書物はその他にいくらかもある。然し今はあくまでも、初学者への手引きということに重点をおいての紹介であり、高度の研究書推薦はここでの目的でないことをこわっておく。入門以後は研究論文や辞書をたよりに、自分で道を探す労を惜しんではならない。漢文の古典的入門書としては、日本の鎌倉時代に書かれたものだが、「八宗綱要」（凝然）によって一度は各宗教義の概要を見ておくのがよからう。古来、天台四教儀や三論玄義が多く教科書として用いられた。それは共に

短い一冊の本の中に、天台宗とか三論宗とかいう特別な宗派にとっただけでなく佛教一般を学ぶためにも基本的な内容と言ってよいようなものが盛り込まれているためである。天台四教儀（高麗諦観）には集註（元蒙潤）だとか集解（宋從義）だとかいう詳細な註釈書ができたけれども、入門的にはそういうものを見ないで、できるだけ大局的にこの簡潔な書物を通して天台学の規模をつかむようにされたい。初から重箱の隅を妻楊枝でつくような研究をしようと、いつまで経っても天台学の偉大さを見出せないで終るかも知れない。「三論玄義」（隋吉藏）も註釈書が頗る多いけれど、金倉圓照博士訳注の三論玄義（岩波文庫）は訳注の方法に工夫がこらされており、初学の者には好適だ。私は前号の拙稿中で、経や論やそれらの代表的註釈書の名を列挙したところ、一向初学者向きの手びぎにならぬという不満を訴えた学生があった。そういうばいかに尤もな次第だが、さて適当な初学者向きの入門書はと考えると、一向思い当るものがない。止むを得ず強いて求めるとすれば、上記の八宗綱要・天台四教儀・三論玄義位のものであろう。或は「阿弥陀経」だとか「無量寿経」だとか、「法華経の方便品」だとか、「維摩経の弟子品」だとか、「金剛般若経」だとかいうよ

うに、身近かな短い經典か又は長い經の中の主要な一部だけを読んで、徐々に術語を通して佛教の考え方を体得するように努めるのもよからう。それから後は指導の教授に相談する外ない。前号では望月博士の「佛教大辞典」や「佛書解説大辞典」を使うように勧めた。だがまだそれまで使いこなせない間は、横超・舟橋・多屋の三人で共編した軽便な「佛教学辞典」（法蔵館）や、昭和新纂の国訳大蔵經に附録としてつけられた「佛典解説」（東方書院）というものなどを参照するのもよい。佛教学辞典の姉妹篇として、「佛教史辞典」の出版が今すすめられているから、遠からず研究者の方々にまみえることであろう。

尚最後につけ加えておきたいことが二つある。一つは佛教学の中でも禪と密教とはとりわけ特殊な性格のものであるから、書物による知識の修得や理論的思索だけでは、どうしても真に迫ることができぬということ。これは師について学ぶほかないようである。今一つは律を通して佛教徒の生活実態を知っておくのが必要であるということ。平川彰博士の「原始佛教の研究」（春秋社）などは正にそのよき指導書であり、漢訳の聖典では四分律含注戒本（唐道宣注）や梵網菩薩戒經の一読を勧めておきたいのである。